令和５年度　棗校の研究について

研究主任

Ⅰ　研究主題

「子どもが本気になる授業づくり」

【目指す児童生徒の「本気」の姿】

レベル３（本気）	「もっとやってみたい！」と前向きに活動している（主体的）
レベル２	自分からやってみる（自主的）
レベル１	言われたからやってみる（受動的）

【目指す児童生徒の学びの姿】

①　主体的な学び

学習課題に対して主体的に取り組み、自分たちの力で解決していく姿

②　対話的な学び

学習課題の解決に向けて、児童生徒同士が積極的に関わり合い、必要に応じて話し合いを行う姿

③　深い学び

自分の考えを持ち、協働的に学び合う中で、新たな知識を創造する姿

【実現するために】

①　対話活動の推進

児童生徒が関わり合って学びを深めるために、効果的な対話活動の取り入れ方や指導方法を探ることで、授業改善を図る。

②　振り返り活動の推進

児童生徒の考えの変容や学びの成果がよく分かり、次の学びにつながる振り返りの仕方を探ることで、授業改善を図る。

③　授業デザイン部会での取組

児童生徒の学びの見取り方を研究し、授業改善を図る。

④　課題設定部会での取組

児童生徒が意欲的に学びに向かうための、効果的な課題設定の工夫の仕方や指導方法を探ることで、授業改善を図る。

２　主題に至る経緯

本校は、令和３年度より、研究主題を「仲間とともに学ぶ子の育成～多様な意見を生かす授業づくり～」とし、２年間研究してきた。研究主題である「仲間とともに学ぶ子」の育成を目指し、以下に記す５つの具体的な姿を目標として設定した。

〇主体的に学ぶ姿
〇対話的に学ぶ姿
〇新たな見方・考え方を獲得する姿
〇他者の意見を尊重し、傾聴する姿
〇学びを振り返り、自己の成長を自覚し、次につなげる姿

また、研究組織として「対話部会」と「振り返り部会」を組織し、対話活動・振り返り活動を取り入れた授業づくりの研究を進める中で研究主題の達成を目指した。以下に、２年間の研究の成果と課題を記す。

（１）　研究の成果

①　教師の対話・振り返りに対する理解の深まり

全教員が積極的・継続的に、対話活動や振り返り活動を取り入れるようになった。令和４年度２月に行った教員対象のアンケートでは、「児童生徒が、自分の考えを発表しやすくなるような支援や雰囲気づくりをしている」と「友だちの意見の聞き方の指導や、対話の進め方の指導をしている」という項目に対し、全教員が前向きな回答を示した。

②　児童生徒への対話・振り返りの浸透

教員の意識の高まりによって、児童生徒の中に対話・振り返りが浸透し、より主体的に学習に取り組む姿や、学習内容をさらに深く理解している姿が見られるようになった。令和４年度２月の児童生徒対象のアンケートでは、対話・聴き方に関する全ての質問項目に対し、前向きな回答をしている児童生徒が、小学校ではが 90%以上、中学校では 70～90%となり、令和２年度より向上した。

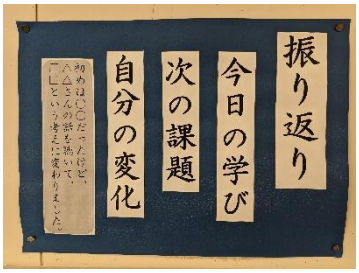
（２）　令和４年度の課題

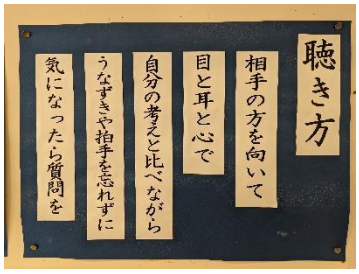
①　アンケートで否定的回答をする児童生徒の固定化

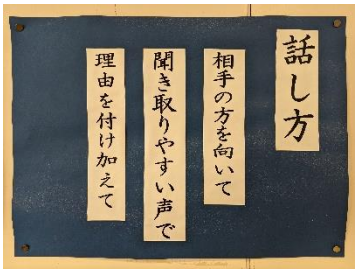
アンケート結果で、前向きな数値の向上が見られない学年では、否定的な回答をする児童生徒が固定化されていた。その児童生徒は、生徒指導上で気がかりなことがあったり、学業不振であったり、特性を持っていたり、理由は多種多様である。児童生徒一人一人の実態に合わせた指導を考えていく必要があるといえる。

②　児童生徒の本気を引き出し切れていない

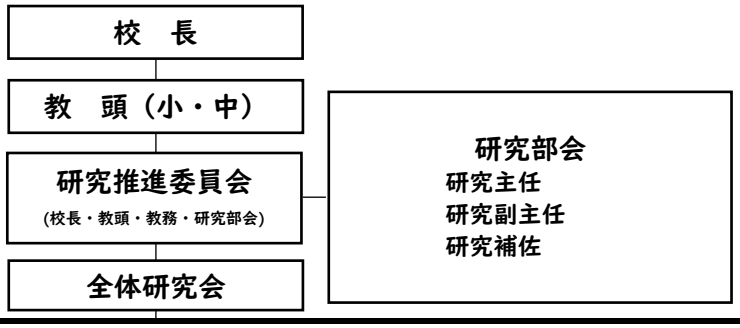
最終の各部会では、「対話・振り返りが形式的になってしまう」といった反省が挙がった。その一因として、研究部が設定した対話（話し方・聴き方）・振り返りの型（下図）にとらわれすぎてしまっていることが考えられる。型を教員や児童生徒に提示したことで、対話活動や振り返り活動が授業に取り入れられるようになり、児童生徒にも浸透した。しかし、「発表後は拍手をする」というルールを作った学級では、どの発表に対しても同じ反応が返ってきてしまう。また、「振り返りには今日学んだことを書く」というルールを作った学級では、授業のまとめを形式的に書く児童生徒が増えてしまった。本校の多くの教員が対話や振り返りをさらに質の高いものにするにはどうしたら良いのか、課題に感じている。また、それらが要因となり、「本気で考えを伝えたい」、「本気で理解したい」、「本気で振り返ろう」という姿が見られないことを悩みに抱える教員がいることが分かった。それらに対して、「本気」を引き出すためには、児童生徒が目標をもって学習できるようにするべきだといった提言も挙がっている。







３　研究の組織と取り組みの方向性



各部会			
Ａ：授業デザイン部会（図書室）		**Ｂ：課題設定部会**（会議室）	
小	教員４名	小	教員５名
中	教員４名	中	教員４名
【部会の趣旨】 児童生徒の学びの見取り方を研究し、授業改善を図る。		【部会の趣旨】 児童生徒が意欲的に学びに向かうための、効果的な課題設定の工夫の仕方や指導方法を探ることで、授業改善を図る。	
【部会の柱】 （１）教師の授業デザイン力を磨く １時間の授業をデザインしていく上で大切なことは、単元目標の達成を目指した単元計画、および毎時間の授業構成が不可欠である。以下の点を中心に教材研究をおこなっていく。 ・課題設定の工夫 児童生徒が主体的に１時間の授業に取り組めるかどうかは、授業開始の５分で決まると考えている。したがって、児童生徒が課題に対して主体的になる教材の提示方法や発問の仕方、課題の視点の与え方について研究していく。 →校内の一授業や授業参観、他校の参観授業を通して分析、報告等を通して研究をしていく。 ・展開時での工夫 個別最適な支援の在り方を考える。具体的には「課題」に対しての個人への迫り方、グループ活動、ペア活動など通して協働的な学びのよりよい方法、さらに ICT 機器の効果的な活用方法を探る。 →校内の一授業や授業参観、他校の参観授業を通して分析、報告等を通して研究をしていく。またＩＣＴの活用については、本部会でＩＣＴに長けている教員がいるので、実際にレクチャーや実演をしてもらい教員の研修を図っていきたい。		【部会の柱】 (１)授業の導入での課題提示の工夫 教材との出合わせ方を工夫することで、児童生徒の「やりたい！」気持ちを引き出す。毎時間の導入だけでなく、単元の導入から工夫することで、児童生徒の興味関心をひきつけ、本気で学ぼうとする意欲につなげたい。具体的な取り組ませ方については、ICT 機器を活用して画像や動画を提示したり、学校生活に関わりのある題材を扱うことで課題を自分事として捉えさせたり、様々な手法が考えられる。教科の特性や児童生徒の実態に応じて、教員が各自で工夫して授業実践を行い、進捗状況を各部会で報告し、よりよい課題提示の在り方について、探っていく。 →各教員で上記の取組を行い、よりよい課題提示の在り方について探っていく。 (２)児童生徒自身の目標設定 児童生徒の向上心を引き出すために、児童生徒が目標を設定する授業づくりを行う。児童生徒自身が目標を設定することで、達成度を振り返ることが期待される。さらに、教員はその振り返りを生かした課題提示につなげることも期待できる。児童生徒自身の学びのＰＤＣＡサイクルを見通した単元構成をデザインすることで、児童生徒の本気で学ぼうとする意欲につなげたい。具体的な取り組ませ方については、各自の目標設定から毎時間の成長を振り返る方	

・振り返りの工夫と活用

児童生徒自らが自己変容を自覚し、次の授業につなげられるようにする。また、次の授業で何をしたいのか見通しをもてるような指導の工夫の在り方を探る。昨年度の研究の課題である「振り返りが形式的になってしまう」、「振り返りをさらに質の高いものにするにはどうしたらよいのか」について、改善策や生徒自身が振り返りをさらに意義のあることにしていくにはどうしたら良いかを研究していく。

→昨年度までの振り返り部会の研究の蓄積の活用と、新たな振り返りの方法、評価の方法について探っていく。

（２)授業の中での「全員評価」と「見取り」と「その対応」

本校の強みである少人数学級、少人数指導を最大限に生かしていきたい。授業時間内での全員の見取り、その時間での評価について研究をし、授業改善につなげていきたい。

→評価方法や見取り方について、校内の一授業や授業参観等、振り返りのワークシートを活用、分析をして、よりよい振り返りについて方法を探っていきたい。

(３)学習面での小中連携

教師の専門性を生かす。発達段階や学習の系統を考慮した指導の工夫を探る。

→本部会でも、中学校教員が積極的に小学校に出向いて授業を行っている。具体的には、小学校５学年６学年の国語科、小学校６年生の社会科、小学校３・４年生の保健体育科である。中学校教員が小学校に出向いて授業を行うこと自体が初めての教員が多く、自然に小学校・中学校との教員のコミュニケーションが図られていく。さらに小学校教員も中学校を見据え先を見通した指導にもつながる。したがって学習面でさらに連携できる部分をさぐりながら、スムーズな小中接続、中１ギャップの克服につなげていきたい。

法や、毎時間の振り返りから次時への目標を設定させる方法など、様々な手法が考えられる。教科の特性や児童生徒の実態に応じて、教員が各自で工夫して授業実践を行い、各部会で進捗状況を報告し、目標設定のよりよい在り方について、探っていく。

→各教員で上記の取組を行い、よりよい目標設定の在り方について探っていく。

(３)明確な評価基準の作成（ルーブリック）

教師自身が児童をどのような姿に育てたいのかを明確にイメージすることで、児童生徒の目標設定につなげる。育てたい姿を明確にするには、教科の目標・単元の目標・本時のねらい・児童生徒の実態を詳細に把握することが大切であると考える。

→普段の授業から、育てたい児童生徒の姿を明確にイメージし、授業実践を行う。指導案に明記する。

(４)深い学びを目指した対話活動･振り返り活動の推進

対話活動の在り方を工夫することで、児童生徒の学びを広げたり、深めたりする授業づくりを行う。また、振り返り活動を取り入れることで、「わかる・できる」授業づくりに努める。

→前年度までの研究成果・課題をとらえ、試行錯誤しながら授業実践をしていく。

(５)ＩＣＴ機器活用の推進

学習活動をよりよい取組にするために、ＩＣＴ機器の活用を推進する。具体的な手法はこれから研究していく。誰にでも取り組みやすいＩＣＴ機器の活用方法を探っていく。教員だけでなく、児童生徒が ICT 機器を活用する授業づくりを目指す。

→本校の多くの教員が、ＩＣＴ機器をどのように活用したらよいのか、課題に感じている。研修会に参加したり、すでに活用している教員の実践を参考にしたりして、どの教員にも取り組みやすい ICT 機器の活用方法について探る。

※各部会での取り組みは２年間（令和５・６年度）の継続を予定している。

４　全体研究会及び研修

（１）　一人一授業

・全員が２年間のうち１回、公開授業を行う。その際、各部会にて授業の事前検討会、事後検討会を行う。
・研究の趣旨に沿った授業を計画し、授業の観点を十分に理解して、焦点を絞った話し合いをする。

（２）　勉強会

・学習の成果や課題を認識させ、言葉で表現できるようにさせるには、どのような支援や指導が必要なのか、実際の振り返りシート等を見せ合うなどして、教員同士で学び合う。
・普段の授業から見えてきた、対話や振り返り、目標設定等、指導上の課題を持ち寄り、解決策を考える。
・教員の得意分野を伝え合い、指導の工夫を学ぶことで授業力向上を目指す。

（３）　授業アンケート

・児童生徒や教員の意識の変容を見るため、授業アンケートを実施する。
・研究主題や各部会の主旨に関連する内容で、質問項目を設定する。
・アンケートは、５月、１０月、２月の計３回実施する。
・学級全体のアンケートの他、ある児童生徒に焦点化して変容を見取る。

（４）　授業見学

・授業の空き時間を利用して、学期に１回以上、授業見学をする。学期ごとの１回目の見学する教員の名前を、週行事予定に記載（リスト作成　別紙参照）。２回目以降は自主的に行う。
・授業者の工夫や良いところ、気付いたことを授業者に伝える。
・指導主事訪問一般授業も積極的に参観する。

（５）　校内研修について

・各部会、もしくは全体研究会を各学期に１回開き、日頃の授業実践の情報交換を行う。児童生徒の変容について交流し、研究の具体化を目指す。
・長期休業等を利用し、現職教育として授業力向上のための研修を行う。

５　研究実施計画（２年間）

授業デザイン部会	課題設定部会
１年目：蓄積期	
勉強会①（４／２８）	勉強会①（４／２７）
第１回　学習アンケート（５月上旬）	
指導主事訪問Ⅰ（６月９日）	
	一人一授業①（６／１３）
勉強会②　小学校対象　リコーダー講習会　（７／１１）	
勉強会③　ICT 機器学習会（７／５）	
勉強会③　ICT 機器オンライン学習会　巻下氏（７／１２）	
現職教育　特別支援　耳の不自由な児童への支援（８／２３）	
現職教育　ICT 機器の活用（８／２３）	
第２回　学習アンケート（１０月中旬）	
一人一授業②（10 月）	
一人一授業④（10 月）	一人一授業③（10 月）
勉強会③（10 月中旬）	勉強会③（10 月中旬）
授業研究発表会（指導主事訪問Ⅱ）（１２／１２）	
勉強会④（２月中旬）	勉強会④（２月中旬）
一人一授業③（２月中旬）	一人一授業③（２月中旬）
第３回　学習アンケート（２月中旬）	
研究の年度まとめ、今後の展望	
２年目：発展期	

日々の研究実践＋授業見学

発展期での目標

・児童生徒が学習の成果と課題を認識し、表現できる授業を実践する。
・授業実践を積み上げ、児童生徒の「本気で取り組みたい」気持ちを引き出し、主題を実現する。